

平成二十年度 入賞・最終選考作品集



主催／福島県教育委員会

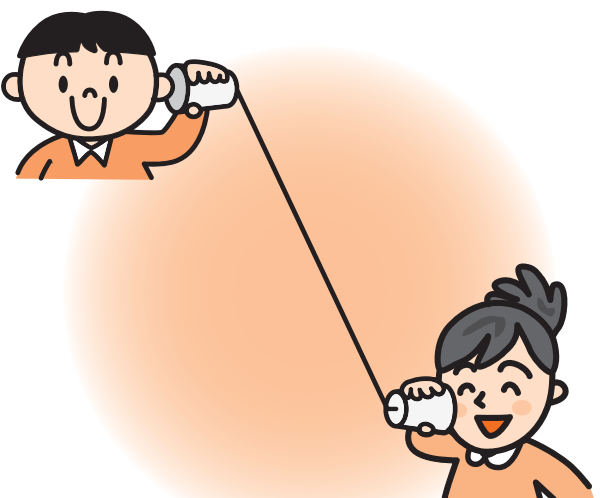
五・七・五 わくわく体験・心と心のハート

十七字のふれあい

表紙は平成19年度「家庭の日」絵画の部最優秀作品です。

入賞作品

最優秀賞



【体験場所 自分の家】

新発見 ぼくのケータイ 糸でんわ

いわき市立中央台北小学校 四年 鈴木 嶺

子とあそび 会話がはずむ 糸でんわ

母 鈴木 留美子

〈創作の動機〉

糸でんわを作つて遊んだら、まるでケータイでんわのようだった。

〈評〉

親子の語らいの基本は、同じ目線で、かつ率直な心のかげ橋を形成することです。携帯電話時代の今、この作品での「糸でんわ」体験は、コミュニケーションの在り方を考えさせられる新鮮な響きがあります。

〈塚本 繁〉

【体験場所 プール】

目をあけて プールの中で 泳げたよ

鮫川村立鮫川幼稚園 我妻 成貴

沢山の はじめてを知る 夏休み

母 我妻 ひとみ

〈創作の動機〉

今年の夏は、一緒に過ごす時間が多く、親として子どもの成長を感じることもたくさんありました。その中で、初めてのことにどんどん取り組む姿は、たくましさを感じ、うれしい出来事でした。

〈評〉

努力の甲斐あって、「泳げたー」という喜びの声が作品から伝わります。何事も頑張ればいい結果になることがわかったことは、すばらしい体験です。お母さんの作品からも、お子さんの頑張る様子を見守る温かさが十分伝わります。

〈坂本 忠雄〉

【体験場所 家】

泣きやまぬ

弟だいて 助けよぶ

福島市立蓬萊東小学校

五年

鈴木祥子

子守りする

小五の姉の たのもしさ

母 鈴木直子

〈創作の動機〉

七ヶ月になる弟の世話をしていると、何をしても泣きやまないことがあります。でも、お母さんがだくと、ま法をかけたみたいに泣きやみました。

〈評〉

一読してあたたかい家庭の雰囲気が伝わってきて、ホッとした心情にさせてくれます。素直な表現に好感が持てました。十歳差の姉と弟の二人に幸多かれと願うことしきりです。

〈津村 栄〉

【体験場所 自宅の玄関】

秋の精

葉うらにかくれて

出番待ち

郡山市立行健小学校

六年

馬場田 あや乃

うつすらと

染めにし楓 秋きぬと

母 馬場田 真理子

〈創作の動機〉

楽しい夏休みも終わるころ、特設合唱の練習をしに登校する時、ふと自然に目をやると玄関の青かえでが色づき始めていて、ああ、二学期が始まるんだなあ…合唱の大会ももうすぐだなあと思いました。

〈評〉

何気ない日常の流れの中で、親と子が、同時に同じ場所で、ふと自然のうつろいに気付き、共感的体験をモチーフにした作品です。このような感動は、それぞれの明日への創造の原点となります。

〈塚本 繁〉

【体験場所 台所】

皿洗い

母の手際に 年季の差

いわき市立小川中学校

三年

遠藤 夏奈江

皿洗い

並んでわかる 身長差

母 遠藤 優子

〈創作の動機〉

夏休み、久しぶりに母の手伝いをした時、お皿を棚にしまう母の手際よさに、主婦のすこさを感じました。

〈評〉

親子そろつての台所仕事の情景が浮かんできて心が和みます。常日頃のすばらしい家庭生活があればこそ生まれた作品でしょう。「年季の差」「身長差」にピカリと光るものがあります。

〈津村 栄〉

優秀賞

【体験場所 相馬の海水浴場】

かいとすな うまくできたよ おみぞしる

福島市立福島第二小学校 一年 岩見浩香

楽しいね 砂浜広い 台所

母 岩見裕子

〈評〉

家族で過ごした海水浴場での楽しい砂遊びの情景が目には浮かび、自然にほほえみがわいてきます。お母さんの台所での様子を砂遊びの中で再現しているお子さんの姿を見守るお母さんの温かい視線を強く感じます。

〈坂本 忠雄〉

【体験場所 おうち】

おさいほう ぞうきんぬつて ゆかみがき

本宮市立和田小学校 二年 森 こまち

親と子の 心を結ぶ 針と糸

母 森 智香

〈評〉

お母さんの針仕事を見習って針仕事に挑戦し、見事雑巾を縫い上げたばかりか、床磨きを行うなど、立派な行いにとっても感心しました。二針一針に、子と親の思いがしっかりと刻まれているものと強く感じました。

〈坂本 忠雄〉

【体験場所 家の居間】

手をあわせ 香の煙に 祈りのせ

福島市立飯野中学校 二年 大内 茉奈

盆棚を 飾りし提灯 子へ繋ぐ

母 大内直美

〈評〉

ご先祖様を敬う心根を育む盆行事を通して、体験的に学習することが極めて大事なメッセージであることを詠んだ作品です。

〈塚本 繁〉

【体験場所 海辺の広場】

波の音 テントの中から 耳すます

郡山市立日和田小学校 四年 石澤 朱里

よりそつて テントですごす 夏の夜

母 石澤直美

〈評〉

楽しい夏休みの中で、特にキャンプは最高なものです。ね。「耳すます」「よりそつて」の言葉の中にそのうれしさと家族のなかむつまじさがにじみ出ています。

〈津村 栄〉

【体験場所 塙町植田公民館】

父さんと 笛をかかなでる 盆おどり

塙町立高城小学校 五年 鈴木 朝香

笛の音が いつかふるさと 思い出す

父 鈴木 一弘

〈評〉

盆踊りのやぐらに登って笛を吹くことの喜びと娘さんの将来を見通しての父親の心遣いに心うたれます。今後も、伝統芸能の発展と保存にご尽力をお願いします。

〈津村 栄〉

【体験場所 海の浜辺】

焼けるせに 気づかず高く 砂の城

棚倉町立棚倉小学校 五年 吉田 優衣

白と黒 優しく洗う 子の背中

父 吉田 智

〈評〉

海水浴の情景ですね。砂遊びに夢中になっている姿が目に見えます。お父さんはテントの中にばかりいたので白いままなのか、娘の背が白黒なのか……とてもいい場面をとらえられたと思います。

〈津村 栄〉

【体験場所 うちのはたけ】

あお虫が やさいばたけで 朝ごはん

会津美里町立本郷第一小学校 三年 神村 龍飛

安全な 野菜作りに 孫の顔

祖母 神村 正子

〈評〉

あお虫が食べた野菜は、安全であることが保障済みです。この作品から、「食の安全とは何か」をしっかりと考えていることがわかり、とても感心しました。下五の「朝ごはん」の表現は、とてもすばらしいと思いました。

〈坂本 忠雄〉

【体験場所 家からひばりヶ原へ】

野馬出陣 祖父・父・ぼくと 並び行く

南相馬市立小高小学校 六年 本田 賢一郎

野馬追の 親子三代 夢叶う

祖父 本田 信夫

〈評〉

親子三代で晴れの伝統行事に臨む緊張感とそれぞれの喜びが胸に響く作品です。

〈塚本 繁〉

【体験場所 自宅】

勝てるかも 思つて勝てず 母の腕

南相馬市立小高中学校 一年 村田 彩

腕相撲 まだまだ負けず 母の意地

母 村田 恵美

〈評〉

子どものチャレンジをしっかりと受けとめ、その成長・発達を確かめる母の思いが伝わってくる作品です。

〈塚本 繁〉

【体験場所 田んぼの土手】

逃げ水に 草刈る父の 影揺らぐ

福島県立磐城桜が丘高等学校 一年 國井 郁子

一涼を 得る娘の声と よもぎの香

父 國井 義人

〈評〉

真夏日のさなか、草を刈るお父さんを気遣うお子さんの思いが「影揺らぐ」の表現に十分感じられます。また、機械を使うお父さんもお子さんの二言に安全に気を付けてもうひと頑張り、気合いを入れる感じが十分読み取れます。

〈坂本 忠雄〉

佳作

審査員特別賞

なみにのり じゃんぶしたよ しておのあじ
二本松市立下太田小学校 一年 松原 理花
まぶしいな 波にのれずに 砂遊び
母 松原 直美

青い空 父を目がけて サープする
郡山市立郡山第二中学校 一年 志村 美咲
ラケットに 思いをのせて 打ち返す
父 志村 隆弘

楽しいな 二泊三日の 一人旅
福島県立郡山養護学校中部 二年 小針 千穂
お帰りと 我が子抱きしめ ホットする
母 小針 英子

うごいたよ ぼくのおなかと はなしてる
白河市立五箇小学校 一年 佐藤 瑠
やさしい手 もうすぐあなたは おにいちちゃん
母 佐藤 香奈

まかせてね 今日は 私がコックさん
会津若松市立荒館小学校 四年 最上ひなた
念をおす 後片づけまで お料理よ
母 最上 恵

たのしいね むしとおはなし くさむしり
会津若松市立小金井小学校 三年 岸 陽道
草むしり とびだすカエルに しりもちだ
母 岸 ゆかり

おんぶして 祖母が小さく 感じた日
磐梯町立磐梯第一小学校 六年 古川 若菜
足くじき 背負った孫に 背負われて
祖母 古川まち子

手のひらの 蛍の光 きれいだな
富岡町立富岡第一小学校 二年 熊谷 梨花
残さねば 蛍の光 子の笑顔
父 熊谷 政輝

デビュー船 父のしかけで さおがしら
大熊町立大野小学校 三年 関根 佑真
息子連れ メバルの引きに 竿しなる
父 関根 浩二

母の手は 手ぶくるよりも あたたかい
いわき市立小名浜第一小学校 四年 遠藤 愛奈
手をつなぎ 散歩するのも いつまでか
母 遠藤 裕美

ばあちゃんど 朝どりトマト 元気色
二本松市立上川崎小学校 五年 佐藤 駿人
孫の手に 自然の恵み あふれてる
祖母 佐藤 久子

どうしても 越すことできない 母の味
福島県立白河旭高等学校 二年 大平 舞
夏の夕 肩をならべて 台所
母 大平 淳子

肩たたき 母の白髪に 気づく夏
矢吹町立矢吹中学校 二年 須藤早桜子
もみじの手 肩にぬくもり 十四年
母 須藤美智子

青白く 宝石のよう せみの羽化
会津若松市立小金井小学校 五年 渡部 陽
薄あかり 命の息吹 子らと見る
母 渡部 成美

お祭りの 横笛スラスラ おぼえたよ
喜多方市立松山小学校 四年 京野 未来
気がつけば むすめにならう まつりぶえ
母 京野 貴子

ばあちゃんに かしてあげるよ ぼくのかた
南会津町立荒海小学校 五年 渡部 峻大
やさしさに 心もポカポカ 温泉旅行
母 渡部美代子

指先で 心をつなぐ 手話ことば
広野町立広野小学校 五年 鈴木 宏昌
触れ合いで 生きかた学ぶ 手話社会
母 鈴木 清枝

かしわもち 母の想いを 葉で包む
浪江町立浪江東中学校 二年 佐藤 朱華
粉こねて 娘に伝える 祖母の味
母 佐藤 優美

照れくささ 忘れて投げる ストライク
福島県立磐城桜が丘高等学校 一年 西山 博規
投げてくる ボールにこもる いたわりが
母 西山 明美

ピザ作り こねてのばして 楽しいな
いわき市立汐見が丘小学校 三年 志賀 由惟
子と作る ピザに笑顔も トップینگ
母 志賀 悦子

奨励賞



カブトムシ あみがとどかぬ 高い場所
川俣町立川俣小学校 三年 菅野 充
もう少し これでとどくか 肩ぐるま
祖父 菅野 藤吾

じいちゃんのはらのまくらで リラックス
北塩原村立裏磐梯小学校 一年 酒井 翔太
祖父と孫 どちらが 親分子分かな
母 酒井 聖美

うれしいな いっぱい生まれた かぶとむし
大玉村立大山幼稚園 年長 高橋 健太
大変だ 世話をするのは パパの役
父 高橋 健一

山のぼり たのしかったね またいこう
湯川村立勝常小学校 一年 齋藤 夏葵
山くんだり 泣かずにできたら また行こう
母 齋藤真理子

落とすまい 母が繫いだ このボール
天栄村立天栄中学校 三年 大木 裕介
十五歳 夫に似てきた 子の背中
母 大木 弘子

一口で 祖母の愛情 あふれだす
柳津町立西山中学校 一年 鈴木 陽
おいしいよ その一言で 疲れとぶ
祖母 谷津 英子

タッチして 後ろを見ると 泳ぐ父
石川町立石川小学校 三年 佐藤 尚哉
手かげんが いらなくなった 水泳ぎ
父 佐藤 賢一

花をあげ よろこんでくれた そのえがお
三島町立三島小学校 三年 坂内 萌人
曾孫らと 米寿の祝 萩の宿
曾祖母 小山ミツイ

お手つだい シーツのうらに かくれんぼ
玉川村立須釜小学校 三年 塩田 綺花
洗濯で シーツの裏に 笑顔あり
母 塩田 春江

夏げいこ 毎日あって つかれます
金山町立横田小学校 三年 滝沢 智宏
下がらずに 苦しいだろうが 面を打て
父 滝沢 和俊

土の中 早くでてこい かぶと虫
平田村立蓬田小学校 三年 上遠野瑞貴
背をまるめ ためいきひとつ のきゅうり
父 上遠野 正

そばのこな こねこねませる たのしいな
栖葉町立あおぞら子供園 年中さくら組 新妻 桜
背のびして お顔にいっぱい 粉つけて
母 新妻みよ子

ごみひろい たばこのすいから いっぱいだ
浅川町立山白石小学校 一年 福田 雅弥
情けない 落ちているのは 親の恥
母 福田三千代

ねぎをむく しごとはいつも いそがしい
川内村立川内小学校 三年 古内 伸幸
涙目で 皮むく孫に つい苦笑
祖母 古内 淑子

買物の お荷物持ちは まかせてね
三春町立三春小学校 四年 橋本日南子
鼻唄で 荷物持つ子に 目を細め
母 橋本 晴子

あと少し ○・六キロ あれ長い
飯館村立飯館中学校 二年 八巻 実里
「頑張つて！」 子に励まされ 尾瀬の道
母 八巻あけみ

最終選考まで残った作品

もぎたての きゅうりがぶりと 丸かじり

福島市立清水小学校 六年 小野日菜子

胡瓜採り 高い所は 孫だのみ

祖母 佐々木秀子

おゆの中 しりとり大会 ほくと母

福島市立荒井小学校 二年 登坂 大斗

子と向かい 心ぼかぼか 会話風呂

母 登坂和可子

ナスの牛 祖母と作って 盆用意

福島市立湯野小学校 五年 大槻 綾

飾りたる 遺影ほほえむ 盆近し

祖母 大槻恵美子

なみあそび 帰りたくない 帰りみち

福島市立三河台小学校 二年 近野 智哉

夕日背に 笑顔でおとす うきわ砂

父 近野 典男

エコしよう ダイオキシンを とめなくちゃ

福島市立森台小学校 四年 本多 耕大

それ、いいね うちでもできる 地球のそうじ

母 本多 静子

お盆前 早おき手伝い 墓そうじ

福島市立飯坂小学校 六年 紺野 翔太

墓そうじ 手伝う子等が 成長る

父 紺野 義秋

作文を 泣き泣き書いた 夏休み

福島市立金谷川小学校 六年 楠田 友唯

娘みて はなしききつつ もらい泣き

母 楠田まゆみ

迎え火で おかえりなさい 先祖様

福島市立福島第四中学校 一年 四家加玲音

留守の墓 しぼし預かり 蟬時雨

祖父 四家 剛

母寝こみ 今こそできる 恩返し

福島市立飯野中学校 一年 佐藤 涼太

熱を出し 助けてくれる 子供の手

母 佐藤美代子

つるつると すべりながらの ふるあらい

二本松市立北戸沢小学校 一年 菊地 優羽

心配で 手伝い見てる 父と母

母 菊地 良子

きもだめし だまされないぞ なかないぞ

二本松市立上太田小学校 六年 菅野 康男

くらやみで おぼけのやくも こわいのよ

母 菅野 福子

ぼくいまね しんばいことが あるんだよ

二本松市立木幡幼稚園 武藤 直輝

だいじょうぶ 蚊にさされたら くすりぬる

母 武藤 直美

部活帰り うれしはずかし 父むかえ

伊達市立松陽中学校 一年 丹伊田里奈

変だけど 隠れるように 娘待つ

父 丹伊田一正

友達と 稚児舞いおどる 夏祭り

伊達市立保原小学校 四年 藤井けあき

ヒグラシや 娘の稚児舞に 夏来たり

父 藤井 透

大発見 かなり大きい ありじごく

伊達市立上保原小学校 六年 丹伊田 翼

残念ね すすめの砂あび その跡よ

母 丹伊田由美子

三人で 水きりあそび たのしいな

伊達市立上保原小学校 二年 小林 大祐

石投げて 息子に自慢 跳ねた数

父 小林 泰久

高灯籠 曾祖母帰る 道しるべ

本宮市立本宮第二中学校 一年 伊藤 大生

灯籠の 灯を見て憶う 祖母の笑

母 伊藤 奈東

とびはねた ねぶたまつりを わすれない

本宮市立五百川小学校 二年 柳沼 洋輝

らっせいら 赤いおこしで とびはねる

母 柳沼 靖子

夏休み いつもカミナリ お母さん

本宮市立岩根小学校 五年 宍戸 涼

夏課題 追い込みバトル 風物詩

母 宍戸 浩巳

歌たどる ゆつくり歩く 夏の尾瀬

桑折町立醸芳中学校 三年 田川 友子

念願の 尾瀬の木道 夏一人

父 田川 卓史

砂のしろ 波がザブーンと 消しちゃった

国見町立藤田小学校 四年 石川 隼斗

身を守る 流されないよう 思い出を

母 石川 増美

おえかきで みんなのおかお にこにこだ

私立希望ヶ丘幼稚園 年中 滝沢 直央

子の心 何でも分かる お絵書帳

母 滝沢 瑞恵

ママみてて みずにもぐって じゃんけんぽん

郡山市立日和田小学校 一年 滝澤 日那

ちっちゃな手 はつきり見えたよ 水の中

母 滝澤 千夏

竹とんぼ じいちゃんのが 一ばんだ
 郡山市立高倉小学校 二年 椎根 隆人
 くるくると 孫の笑顔と 竹とんぼ
 祖父 椎根 十治
 二人旅 楽しかったね お父さん
 郡山市立柴宮小学校 三年 栗田 悠真
 息子との 絆深めた 尾瀬の路
 父 栗田 勉
 大波と 力くらべの 対決だ
 郡山市立行健第二小学校 四年 湯浅 遼太
 人生の 大波小波を 越えてゆけ
 母 湯浅 直子
 ほたるさん ちょうちんもって どこいくの
 郡山市立栃山神小学校 四年 矢部 一大
 父と子の 話ふくらむ 蛭道
 母 矢部恵美子
 サンゴしよう 見つけたほくの 水族館
 郡山市立上伊豆島小学校 四年 木村 太星
 空の青 背に受け見いる 海の碧
 父 木村 勝彦
 たきつぽへ 勇気をだして 飛びこんだ
 郡山市立鬼生田小学校 四年 山田耕太郎
 それ飛べ！と 思わずその場で ジャンプする
 父 山田 祥司
 作ったよ 私の畑 夏まつり
 郡山市立小原田小学校 五年 関本 遙花
 庭先で 母子楽しむ 夏野菜
 母 関本 朋美
 菊畑 祖父母を手本に 花を摘む
 郡山市立郡山第二中学校 一年 新田 茉季
 汗さえも 孫の笑顔で 輝いて
 祖父 新田不二夫
 たのしいな ブラックベリー つんだ夏
 福島県立あぶくま養護学校高等部 一年 金田 淳
 かご一杯 ブラックベリー 夏の味
 母 金田 美幸
 おはなしで わくわくどきどき もらえるよ
 須賀川市立西袋第二小学校 一年 樽川のか
 「これ、よんで。」 ふたりでいっしょに ほんのたび
 母 樽川 美亜
 まけないぞ せみのだつぴと ねむいぼく
 須賀川市立第二小学校 二年 二瓶 陽祐
 揺り起こす 脱皮の瞬間 見せたくて
 母 二瓶由理子
 はじめての うまのせなかは あったかい
 須賀川市立第三小学校 三年 高木ひより
 馬に乗る 我が子カチカチ 余裕なし
 母 高木 寿子

自転車の 旅はのんびり マイペース
 須賀川市立第三小学校 四年 館脇慎太郎
 振り返り 振り返りつつ ペダルこぐ
 母 館脇 美紀
 台所 二つ並んだ 似た背中
 須賀川市立稲田中学校 三年 深谷 海
 茄子料理 今日は煮浸し 覚えてね
 母 深谷 幹子
 父が木を けるとクワガタ 降ってくる
 田村市立美山小学校 五年 佐藤 美歌
 里山へ 夏の主役を 採りに行く
 父 佐藤 澄夫
 おさかなに なったつもりで ういてみる
 鏡石町立第二小学校 一年 鶴沼 侑李
 ゴーグルの 奥の瞳の 勇ましさ
 母 鶴沼ルリ子
 母の分 残さず食べて エコロジ
 古殿町立田口小学校 六年 阿久津太志
 レストラン 半分子に分け ダイエット
 母 阿久津華子
 平泳ぎ 父より蛙が 我がコーチ
 小野町立小野新町小学校 六年 近野 千紘
 あれこれと 言うより池の 蛙指す
 父 近野 高弘
 はか参り ぼくのちょうちん 道案内
 白河市立関辺小学校 四年 鳴島 俊輔
 先祖への 感謝の心 孫が継ぐ
 祖母 鳴島あや子
 七年前 ぼくとこのせみ 生まれたよ
 白河市立白河第一小学校 二年 木村 拓夢
 夜明け前 いのちの光 子を照らす
 父 木村 真一
 お手伝い コロケ作り 母の味
 白河市立白河第一小学校 五年 戸賀穂乃香
 祖母の味 娘と共に 思い出す
 母 戸賀久美子
 へそだして ねたおとうとに ふとんかけ
 白河市立白河第三小学校 五年 新井田 彰
 優しさは 言われてできる ものじゃない
 母 新井田恵子
 流れ星 家族の幸せ 願ってる
 白河市立白河中央中学校 二年 青山 裕輝
 天然の プラネタリウムで 夢話す
 父 青山 貯
 鏡見て 一人で着てみる 夏浴衣
 福島県立白河旭高等学校 二年 鈴木 麻那
 浴衣着の 後ろ姿に さみしさが
 母 鈴木さつき

あさがおに おみずをあけて もつとさけ
 白河市立大屋小学校 一年 渡部 泰介
 花の数 孫と競いし 夏休み
 祖母 渡部 庸子
 うでずもう 五かいしようぶ 五れんぱい
 白河市立大屋小学校 五年 十文字悠花
 おおわらい おやこみんなで うでずもう
 母 十文字洋子
 お習字で お礼のおじぎで ゆかにごつん
 白河市立表郷小学校 三年 吉田 拓人
 正座して おじぎの仕方も 入門期
 習字の先生 大川原恵子
 初登山 祖父と感動 一切経
 白河市立白河第二中学校 一年 田村 芽生
 山に立ち 登りし孫と 仰ぐ空
 祖父 首藤 忠紀
 へボすぎる 親父がなげる 遅い球
 白河市立白河第二中学校 三年 高橋 純平
 速すぎる むすこがなげる 球とれず
 父 高橋 晋
 茜空 祖母への思いに 煙立つ
 白河市立大信中学校 二年 國井志保莉
 迎え火を 家族で囲む あたたかさ
 父 國井 仁志
 水泳で 父と競争 ぼくの勝ち
 白河市立白河第一小学校 五年 大竹 快易
 すすまない 泳ぎ邪魔する メタボ腹
 父 大竹 博幸
 海の中 魚とともに 泳いだよ
 白河市立白河第五小学校 三年 熊田 皓平
 浮輪から 離れし息子は 熱帯魚
 母 熊田 道子
 とうろうを 感謝の心で 流す夏
 白河市立白河中央中学校 一年 小野 真実
 燈籠に 孫の成長 願い込め
 祖父 小野 勝衛
 手料理の 審査委員長 お爺ちゃん
 白河市立白河中央中学校 一年 西崎 七海
 孫作る おやつに茶の間 笑みこぼれ
 祖父 荒井利七郎
 盆休み 迎え火たいて 祖先待つ
 白河市立白河中央中学校 二年 山田 隼南
 むかえ火の 番する息子と 夢語る
 母 山田 澄江
 クワガタが 木にくっついて みつをすう
 白河市立白河第二小学校 五年 秋元 駿英
 カブト虫 捕るも飼育も 親本気
 父 秋元 幸治

おべんとう のこさずたべて ママえがお
 白河市立信夫第一小学校 一年 目黒 太規
 お弁当 おかずと気合いと 愛を詰め
 母 目黒 雅美
 カニいたよ とうちゃんはやく つかまえて
 白河市立信夫第一小学校 四年 鈴木 柔喜
 ほら獲った どうだ父ちゃん すごいだろ
 父 鈴木 隆志
 みずまくら はやくはいたつ するからね
 白河市立大屋小学校 一年 十文字 寛
 つめたいな そのやさしさが あったかい
 母 十文字洋子
 気合いでも 父には届かぬ あと一点
 白河市立白河南中学校 一年 伊藤幸之介
 コーチして いっしかライバル 我が息子
 父 伊藤 直幸
 さかあがり わたしがやるから みてなさい
 白河市立立みさか小学校 三年 小林 依未
 さかあがり どうしておしり おもいのよ
 母 小林 智子
 一二三 水面はずむ ぼくの石
 西郷村立川谷小学校 五年 柳沼 弘道
 水切りの 手本のつもりが 水しぶき
 母 柳沼重佐子
 じいちゃんと おつきなたまねぎ ほつてきた
 西郷村立羽太小学校 一年 鈴木 健士
 喜んで 玉ねぎ起す 孫の顔
 祖父 鈴木勝太郎
 夏の空 とんできそうな はくちようぞ
 西郷村立熊倉小学校 五年 班目 実香
 見上げてる 飛び立ちそうな 我が娘
 母 班目利江子
 亡き祖父の 前向きな姿 胸にひめ
 泉崎村立泉崎中学校 二年 小林 直樹
 天に舞う 花火の中に 父はいる
 母 小林 早苗
 トマトジャム 母の手作り あまずっぱい
 泉崎村立泉崎中学校 二年 先崎 理恵
 ジャム作り 親子で味見 できあがり
 母 先崎 栄子
 そっくりだ わたしとままの かおふたつ
 中島村立中島幼稚園 年少 下川 里織
 歯をみがき 思わずにやけ そっくりだ
 母 下川 愛
 ままみてて ばたあしつかって およげたよ
 中島村立中島幼稚園 年長 辺見 愛那
 うれしそう 泳げた我が子 抱きしめた
 母 辺見 和枝

なつやすみ イモとつなひき まけないぞ
 中島村立滑津小学校 一年 鈴木 勇希
 頑張った 我が子にうれしい イモ料理
 母 鈴木 里美
 ばあべきゆう きょうはわたしが おかあさん
 中島村立滑津小学校 一年 渡邊 楓妃
 「すわって！」 はりきる姿 たのしい
 母 渡邊 裕子
 ゆかた着て 輪になりおどる ほんおどり
 中島村立滑津小学校 四年 尾形 千尋
 盆踊り 仏もびつくり ロック調
 祖母 荒井セツ子
 初めての ミシンのぬい目は なめくじだ
 中島村立吉子川小学校 四年 伊藤 大雅
 よく見てよ 自分の指を ぬっちゃうよ
 母 伊藤 良江
 刻む音 会話もはずむ 親子仲
 中島村立中島中学校 二年 渡辺 紀湖
 夢に見た 娘と共に 夕支度
 母 渡辺 順子
 父親と 同じ趣味持ち 語り合う
 中島村立中島中学校 一年 上遠野一貴
 大物を 釣り上げ楽し 帰り道
 父 上遠野 守
 自分のより 選ぶの大変 母のもの
 中島村立中島中学校 三年 久保田夕貴
 似合うかな 娘の見立てた ニューバック
 母 久保田恵子
 稲の穂で 見えぬ背中に 声かける
 矢吹町立中畑小学校 五年 鈴木 瑞歩
 子の声に 穂波をゆらして いそぐ畦
 母 鈴木 光加
 玉ねぎを 平気で千切り さすが母
 矢吹町立矢吹小学校 六年 佐藤 真生
 玉ねぎで 涙する子に 余裕がお
 母 佐藤 浩子
 草むしり 自然にふれて 大発見
 矢吹町立矢吹中学校 三年 奥山ひかり
 草むしり 毎年増える 謎の草
 母 奥山 祐子
 初登山 父は全身 きん肉つう
 矢吹町立善郷小学校 五年 会田 勇亮
 初登山 励ますつもりが 励まされ
 父 会田美智男
 おいしいよ メロンにみかんに 食べてみて
 矢吹町立善郷小学校 三年 氏家 侑香
 くだものを 心を込めて 袋詰め
 父 氏家 康孝

きのうより きょうはのれたよ いちりんしゃ
 棚倉町立棚倉幼稚園 きくぐみ 片野 恵梨
 支える手 そっと離せば 一人前
 母 片野 博美
 オレンジの 玉の行き来が 絆だね
 棚倉町立棚倉中学校 一年 小松 凌也
 卓球で ラリーをしたら 笑こぼれ
 父 小松 忠久
 お母さん かわいく結んで ゆかたおび
 棚倉町立棚倉小学校 五年 鈴木 瀬奈
 ふわふわと 小さな背中に チョウが舞う
 母 鈴木めぐみ
 スイカ食べ よしきょうそうだ タネとばし!!
 棚倉町立社川幼稚園 はとぐみ 鈴木 夢那
 ムキになり タネをとばして セキこんだ!!
 母 鈴木ひろみ
 見た目より かなりきついよ 石材業
 棚倉町立棚倉中学校 三年 安住 文貴
 ふらつかず 生コン運んだ 一輪車
 祖父 安住 文男
 五月晴れ 母と手を取る 運動会
 矢吹町立石井小学校 六年 安住 榊奈子
 母となり 我が子最後の 運動会
 母 安住 紀子
 白虎隊 果てる青山 手を合わす
 矢吹町立東館小学校 六年 金澤 理智
 鎮魂の 墓前に噺ぶ 蝉しぐれ
 父 金澤 理夫
 僕が踏む みんなを乗せて 走りだす
 矢吹町立下関河内小学校 二年 永山 太一
 子にたより すわっているも 足動く
 父 永山 一則
 おふるでは 何でも話せる お母さん
 矢吹町立下関河内小学校 四年 鈴木 麻希
 お風呂での 会話で子どもの 心知る
 母 鈴木 礼子
 さしかける 相合い傘に 母笑顔
 矢吹町立矢吹中学校 二年 金澤 一希
 タ立も 楽しや相傘 子と歩く
 母 金澤 佳子
 じいちゃんの つめきりながら 笑いあり
 矢吹町立矢吹中学校 一年 富永智佳子
 いやな顔 ひとつ見せない 孫娘
 祖父 富永 衛
 川遊び きれいな水が みりよくてき
 塙町立塙小学校 四年 深谷 紘大
 久慈川を 守る役目も あなたです
 母 深谷 麻紀

- かみなりの おとでうちが こわれそう
 梶町立笹原幼稚園 金澤 恵美
- ほんとだね うちのまうえで あばれてる
 母 金澤万理子
- おおきいよ ぼくとゆうかの いもくらへ
 梶町立梶小学校 一年 二瓶隆一郎
- 孫とほる いもつみ上げて 汗まみれ
 祖父 二瓶 隆男
- ぼくだって やればできるさ 皿あらい
 梶町立笹原小学校 四年 大友 春樹
- やさしさに 子の成長を 垣間見る
 母 大友 昌子
- 朝日陽び 命の誕生 セミの羽化
 梶町立梶中学校 一年 倉片 裕美
- 感動の 娘の出産 思い出す
 母 倉片美佐江
- 迎え火を 父と一緒に 焚いた夜
 梶町立梶中学校 三年 近藤麻衣子
- 花火持ち 庭駆け回る 幼き日
 父 近藤 正伸
- 母さんの 腕と背中に 金メダル
 梶町立常豊小学校 六年 根本 仁史
- 仕事して つかれたせなか 息子の手
 母 根本 悦子
- 秋近し 難問父と 解く課題
 鮫川村立鮫川中学校 二年 圓井龍一郎
- プライドを 捨てず頭は 熱い夏
 父 圓井 和広
- こすいよく はじめてばたあし だいせいこう
 会津若松市立河東学園小学校 一年 石上 飛翔
- 泳げたよ 見慣れた顔が 新しい
 母 石上美佐子
- 力負け 腕がしびれて 動かない
 会津若松市立第五中学校 三年 生江 隆寛
- 筋肉痛 昨日息子と 腕相撲
 父 生江 隆
- びしょびしょで テントを畳む 夏の朝
 会津若松市立第五中学校 三年 渡部 杏果
- ひと晩の ランプの宿も 砂の城
 母 渡部 美紀
- あと少し うまくなれば 父に勝つ
 会津若松市立第五中学校 一年 長谷川真由
- 夏の日に 娘とテニスで かいいた汗
 父 長谷川 均
- よいいドン ふとんとびこみ いきつぎれんしゅう
 会津若松市立河東学園小学校 二年 安藤 明星
- 布団なら 今でも泳げる 100・200
 母 安藤寿津子
- つらいけど あきらめないで がんばった
 会津若松市立湊小学校 五年 相原 佳奈
- 小さな手 磐梯山で ハイタッチ
 父 相原 一也
- なみがきて ぼくとうきわを おしあげる
 会津若松市立城北小学校 二年 齋藤 佑
- 笑い声 優しくつつむ 波の音
 父 齋藤 邦晴
- じいちゃんの 南郷トマト 世界一
 会津若松市立城北小学校 五年 津久井 玲
- 爺と孫 手をとりあって トマトもぎ
 母 津久井洋美
- とうさんの セなかにえをかく セっけんで
 喜多方市立松山小学校 二年 薄 拓斗
- 背を流す その手に感じる 子の成長
 父 薄 清久
- おいもほり たのしかった あつかった
 喜多方市立駒形小学校 一年 大堀 瑞希
- 娘の笑顔 掘った芋より 泥だらけ
 母 大堀 直美
- およぐのは プールのときより むずかしい
 喜多方市立姥堂小学校 一年 菊地 空遠
- 押し寄せる 波と子供の おにごっこ
 父 菊地 和也
- お母さん くつのサイズが 同じだよ
 喜多方市立慶徳小学校 六年 小澤 奈々
- 今度から 母がおさがり もらう番
 母 小澤由紀子
- さかなつり じいちゃんつって ぼくおよぐ
 西会津町立新郷小学校 一年 高橋 由輝
- およがれて つれるさかなが みなにげる
 祖父 佐藤 哲夫
- 見つけたよ 夜空にかがやく 大三角
 猪苗代町立千里小学校 六年 兼田 智章
- 星空を 子供と渡る 天の川
 父 兼田 芳宏
- もう少し 父の言葉に 背をおされ
 会津坂下町立坂下小学校 六年 松澤 礼佳
- タオル引き 絆深める 夏登山
 父 松澤 勝浩

お母さん たまにはおんぶで あまえるよ
会津坂下町立坂下小学校 五年 藤田 理愛
「重いわね。」 言いつつ手はそっと 背にまわし
母 藤田 瑞子

汗握る 岩陰潜む 斑模様
昭和村立昭和中学校 二年 渡辺 潤
清流に 息子と競う 魚突き
父 渡辺 稔雄

巢から落ち 二日を生き抜く スズメの子
昭和村立昭和中学校 三年 菅家奈都見
二夜でも 情が移りし 涙かな
母 菅家 朱美

あさがおさん おぼんすぎても さかないの
下郷町立旭田小学校 一年 伊関 雅
スイッチョン おしえてくれたよ さいたつて
母 伊関 徳子

成功だ 自分で作る マーガリン
下郷町立榎原小学校 四年 渡部 美揺
振り続け やっと出来たね マーガリン
母 渡部よしえ

毎朝の 交わすあいさつ 元気だよ
下郷町立榎原小学校 四年 小椋 千翔
今朝もまた 元気な笑顔に 元気を得
地域の見守り隊 猪股 昭郎

かわあそび ひやけからだか ひりひりと
檜枝岐村立檜枝岐小学校 一年 星 賢太郎
父と子で 背中黒さ 比べっこ
母 星 理良

手つだうよ 丸めてゆでて できあがり
只見町立明和小学校 三年 梁取 奈生
かたち見て 仏器にそえる 盆だんご
母 梁取 啓子

千羽づる いのりをこめて ばあちゃんへ
南会津町立伊南小学校 四年 平野 唯華
母の入院 初めて分かる 親の恩
母 平野 可奈

雷に 追いかけられた 尾瀬の道
南会津町立田島中学校 一年 五十嵐達徳
君の背を 追っては遠く 尾瀬の道
母 五十嵐元美

山頂で 見えた景色は 宝物
相馬市立玉野小学校 六年 吾妻 雄太
夢叶う 孫と眺めた 安達太良山
祖母 本田 節子

とうさんと カニカゴ仕かけた 夜の海
相馬市立飯豊小学校 四年 板垣 優駿
夜の海 仕掛けたカゴに ハモとカニ
父 板垣 良政

父と子で サインかわして 会話する
相馬市立向陽中学校 二年 松橋 悠斗
真夏日に 我が子と組んだ バッテリー
父 松橋 信好

大そうじ なくしたものが でてくる日
相馬市立大野小学校 三年 佐藤 里帆
大そうじ 子供と共に 手を止める
母 佐藤 幸枝

初めての はた織りだけど 大成功
相馬市立中村第二小学校 六年 谷津田菜佑
手伝うと 出したその手の 行き場なし
母 谷津田陽子

みつけてよ こはくのなかに むし6ぴき
相馬市立桜丘小学校 一年 森 鈴花
我先きと 琥珀を磨く 親子かな
母 森 美佐江

つかれたよ 八合目でも 朝日きれい
相馬市立桜丘小学校 二年 星 葉月
泣かないで 登った我子に 御来光
父 星 信一

うんとこしょ 抜けると楽しい 草むしり
相馬市立飯豊小学校 二年 青田 和磨
ドロだらけ 息子見た母 苦笑い：
母 青田 由子

ばあちゃんの 話す言葉は 知恵袋
相馬市立飯豊小学校 六年 羽根田真子
七十年 生きた証を 孫に伝える
祖母 蛭原 映子

傷ついて 分かり合えての 涙顔
相馬市立向陽中学校 二年 高橋 衣里
泣きながら 親子で作る 道しるべ
母 高橋 明美

ママだけど 今日なぜか お母さん
南相馬市立原町第一小学校 三年 岩井 郁也
お母さん 初めて言われた 参観日
母 岩井さおり

除夜の鐘 一人でつけた 十の春
南相馬市立八沢小学校 四年 佐藤 風沙
除夜の鐘 一人突く子の 背に感謝
母 佐藤 公子

- かえるつり つつてたのしい 夏のごこ
南相馬市立八沢小学校 四年 鎌田 湧大
- ウシガエル 釣れたら息子 逃げ出した
母 鎌田 仁美
- あの星は ばあちゃん星だよ なみだ出る
南相馬市立金房小学校 二年 佐藤 葵
- 星を見て 娘のやさしさ ひかる夜
母 佐藤 美香
- 父の手の 線香花火を もらいうけ
南相馬市立原町第一中学校 三年 目黒有貴子
- 花火散る 色とりどりの 娘の笑顔
父 目黒 清雄
- エコライフ 自ら進んで マイバッグ
南相馬市立鹿島中学校 三年 黒川 真衣
- 楽しんで 意識を変えて エコライフ
母 黒川 幸恵
- 夏休み みんなと出合う 帰寮の日
広野町立広野中学校 一年 安東 輝
- 夏終わり 若人たちの 声もどる
指導者 林 晋太郎
- もうどうけんめい めかくしをして あるいたよ
富岡町立夜の森幼稚園 つきぐみ 佐藤 葵
- 「ストレート ゴー」 ハーネスが結ぶ 強いきずな
母 佐藤重紀子
- 見つけたよ 夜空に光る お父さん
富岡町立富岡第一小学校 五年 石田 裕樹
- 見ていてね 頼りになるよ わが息子
母 石田八重子
- とうさんと 楽しく作った サンドイッチ
富岡町立富岡第一小学校 五年 小野菜莉子
- 昼食も 一緒に食べれる 夏休み
父 小野 淳
- とうかいどう あるいてたびする えどじだい
富岡町立富岡第二小学校 二年 村上 久伸
- 関所跡 暑さ身にしむ 夏の旅
母 村上 美香
- 手紙読み 涙止まらぬ 終戦日
富岡町立富岡第二中学校 三年 浜田 夏実
- 戦争の つめあと悲し 遺品物
祖母 池田チヨ子
- さかなつり ぼくのさおには よくかかる
大熊町立熊町小学校 三年 吉岡 聖弥
- 孫が釣り じいは餌付け 専門さ
祖父 阿部 四郎
- 泣かないで 顔色見ながら だっこする
双葉町立双葉中学校 一年 小野田泰顕
- 初いとこ 二人でだっこの うばいあい
母 小野田陽子
- 反則だ ふき出しちゃうよ 母の顔
双葉町立双葉中学校 一年 畑中 郁美
- 顔相撲 腕相撲より 効果あり
母 畑中真喜子
- 将棋する 苦節七年 初勝利
浪江町立浪江東中学校 三年 荒井 豪
- 将棋して 負けてもうれし 子の成長
父 荒井 幸三
- 虫たちの 音にあわせて 月うさぎ
浪江町立請戸小学校 一年 横山 雄哉
- 十五夜の うさぎもいっしょに うたうたう
母 横山小百合
- こま回し 教えてもらい 回らない
浪江町立荊野小学校 六年 瀧 弘貴
- こま回し 巻けない紐に 苦心顔
地域のお年寄 岸 眞
- じいちゃんを 介護する母 支えたい
浪江町立津島中学校 三年 佐藤ゆきえ
- リハビリと 孫の名を書き 笑う義父
母 佐藤 孝子
- くさむしり ぼくもつたう あせかいて
葛尾村立葛尾小学校 一年 丹伊田真大
- 草むしり 手伝うはずが 草ちらし
母 丹伊田真好美
- 山古志の 復興願って 花満開
葛尾村立葛尾小学校 六年 松本 拓朗
- 復興に 願いを込めた 長岡花火
母 松本 久江
- 思い出す ひいばあちゃんの あの笑顔
新地町立福田小学校 六年 荒 美佑紀
- 亡き祖母の 思い出語り 墓参り
母 荒 幸子
- 弟の くさいおむつを とりかえた
新地町立駒ヶ嶺小学校 二年 木村 仁美
- 小さいが うしろ姿は お母さん
母 木村美津江
- 夏休み 祖母の手伝い 花の世話
新地町立尚英中学校 二年 石井 恵里
- ミニバラも 鋭い刺あり 反抗期
祖母 石井 桂子

土かおる 緑みたさに 汗ぬぐう
福島県立磐城桜が丘高等学校 一年 鴨 佳明
種を蒔き 子供の成長 重ぬるる
母 鴨 真理子

おいしいな ぼくがそだてた ミニトマト
いわき市立平第二小学校 二年 東海林 颯
あら不思議 嫌いなトマト 食べている
母 東海林おりえ

坐禅くみ 足がしびれた でもがまん
いわき市立藤原小学校 五年 佐竹 秀啓
がまんする 姿にみとれ 肩うたれ
父 佐竹 浩久

ハゼ二匹 ぼくが釣ったよ デビュー戦
いわき市立錦東小学校 六年 古田 大祐
川釣の 孫の真顔や 夏涼し
祖父 古田 正之

スタートが ドンピシャ決まり 自己ベスト
いわき市立錦小学校 五年 富岡 洸宙
声援よ 追い風となれ 背中押せ
父 富岡 博隆

くつぬいで えほんよんだよ 木のしたで
いわき市立草野小学校 一年 会田 るか
音読の 子らにふと止む 蝉の声
学童指導員 青木 良明

流れゆく 水面に映る 祖母の面影
福島県立磐城桜が丘高等学校 一年 岡崎 舞
夏井川 母との思い出 懐かしむ
母 岡崎 恭子

父とぼく 作せんたてて 魚とり
いわき市立泉小学校 三年 鈴木 飛武
魚追い 川面に二つ 同じ顔
父 鈴木 昇

さよならは またねといえは かなしくない
いわき市立川部小学校 二年 安島 夏純
ホームでの わかれはいつしか 手話となり
祖母 田中かつみ

お父さん めがけて投げる ごう速球
いわき市立鹿島小学校 三年 大高 浩堯
球をとる グラブにひびく 子の力
父 大高 健

川遊び 石で水きり 楽しいな
いわき市立中央台北小学校 六年 渥美 大輔
石はねの 息子と競う 水しぶき
父 渥美 隆

大潮の 海の岩場は 宝島
いわき市立中央台北小学校 五年 千葉裕太郎
カニや貝 息子に教える 父夢中
父 千葉 裕昭

父のたま 右に左に くらいつく
いわき市立中央台北小学校 四年 佐藤 千夏
汗だくで ガンバレ娘 強くなれ
父 佐藤 信弘

お父さん どんな夜空を 見てるだろ
いわき市立平第二小学校 六年 高濱みやび
異国にて 時を合わせて 見る夜空
父 高濱 俊彦

祖父の背を 追いかけてかむ わらびとり
いわき市立湯本第二小学校 五年 奥井 優
「あつたよ」と 振り向く先に 孫の笑み
祖父 奥井 俊一

ぼくだって 水中だったら 力もち
いわき市立藤原小学校 三年 北郷 公大
細腕で 私をぐいっと 持ち上げる
母 北郷 陸美

まが玉を 上手に作るよ 古代人
いわき市立湯本第一小学校 三年 須田 真央
首にかけ 笑顔いっぱい 未来人
父 須田 晃

十余年 共に歩みし 緑の木
いわき市立植田東中学校 三年 大河内真理子
檜の木の 軒を越えけり 蟬時雨
母 大河内香代子

来年は ぜったい玉将 取ってやる
いわき市立中央台東小学校 四年 定久 大晟
泣き顔に 手ごたえ感じる つめ将棋
祖父 椎名 博己

ドンワッセ 体がはねる 汗もとぶ
いわき市立中央台東小学校 五年 尾形 翼
跳ねるたび だんだん体 重くなり
父 尾形 信夫

タガメ君 長生きしたね ありがとう
いわき市立平第四小学校 四年 鈴木 星希
手さぐりの 飼育体験 子の成長
父 鈴木 隆仁



一 コミュニケーションの大切さ

応募作品の多くは、豊かな表現内容にあふれています。親子等の共通体験を作品に詠み上げることは、知る力・愛する力・働く力の三つの力をバランス良く育み、その総合力である人間力を育成することにつながるものです。

特に、人間力の柱であるコミュニケーション能力を身につけることがこの事業のポイントであると考えています。

〈塚本 繁〉

二 大人と子どもの対話の大切さ

句の中から情景・活動・体験等が見えてくる作品や、大人と子どもの感動が巧みに表現された作品が多かったと感心しました。

大人の作品からは、子どもへの深い想いが読み取れました。また、子どもの作品からは、共通体験のすばらしさや大人への感謝の気持ち都十分感じ取れました。このことは、大人と子どもとの対話が心のこもったものであり、これが作品として素直に表現され、「十七字のふれあい」が意義深いものであることを物語っています。

十七字のリズムを大切に自分の想い(感じたこと)を自分の言葉で詠むことのすばらしさを実感しました。

〈坂本 忠雄〉

三 家庭内の絆の強さ

作品の多くから家庭内のあたたかい対話や二世世代間のきめ細かな愛情の交流をうかがい知ることができ、すばらしいと感じられました。

特に、今年度はお父さんを始め、おばあさん、おじいさんの参加も多く、家庭内における絆の強さを感じさせられました。三十代の若いお父さんお母さんの作品も目立ち、大家族、核家族にかかわらず感動的な作品が多数ありました。

出来るならば、「光ることば」を見つけ、独創的な表現にし、類想句と見られないように工夫が出来れば良かったと思われる場面もありました。

〈津村 栄〉

四 作品について

○子どもと大人の共通体験を通じて統一的な表現法が徹底してきていること。

○日本語では、二字の重みが計り知れないこと、漢字とひらがな、片仮名の使用には十分な留意があるべきであること。

○五七五にこだわるあまり、無理な表現にならないように気をつけること。

〈津村 栄〉



あとがき

今年度は四万二千八十組の応募がありました。単純に計算すると約八万二千人余の方が「十七字のふれあい」に応募して下さいたことになります。この事業が県民の皆様の間に大きく広がり、根付いていることを感じるとともに、多くの御応募をいただいたことに感謝いたします。

審査員の評の中にもありましたが、作品からは家庭内の温かいふれ合いが伝わり、親子等のコミュニケーションは、気がつけばいつも自分達のすぐ身近なところに確かにあるということを感じさせられました。

この作品を御覧になった皆様にも、作品の中から家庭内の温かさ、相手を思いやる心を感じ取っていただければ幸いです。